HOPE Bourgogne

サン・タンドウシュ教会

文芸評論家　饗庭　孝男

あえば・たかお
1930年、滋賀県生まれ。甲南女子大学文学部教授。フランス文学専攻。
著書に、『石と光の思想』（勁草書房）、『小林秀雄とその時代』（文芸春秋）、『恩寵の音楽』（音楽之友社）、『西欧と愛』（小沢書店）、『幻想の都市―ヨーロッパ文化の象徴的空間―』（新潮社）、『ヨーロッパの四季』（東京書籍）など多数。

エジプト逃避　　ユダの首吊

ディジョンを車で出てゆるやかな丘の起伏を辿り、ソーリユへ行く。高速をとおり、プウイイで降り、国道81号から6号に出てソーリユに着いた。ほぼ80キロの行程であり、サン・タンドウシュ教会は町のなかにある。この町は17世紀以来、食通の間でつとに評判がたかかった。本来、ブルゴーニュ地方のモルヴァンとオーセロワの交点にあり、市が栄え、旅人が多く集った。文学者、セヴィニエ夫人も1677年8月26日にここに泊まり、豊かな食事に、人生ではじめて陶然となった、と後にかいている。

もっとも私には絵にかいた餅にしか映らず、この町でも適当なカフェでつつましく食事しただけであった。ところで教会は18世紀の美しい噴水のある広場に面している。すでにのべたサント・マドレーヌ教会よりも少しあとにできた教会であるが、もともとは、ギリシャ人の司祭サン・タンドウシュ、サン・ティルス、サン・フェリックスの殉教の地に11世紀にできた修道院教会をこの地に再建したものである。

しかしこのロマネスクの建物も18世紀の大革命では、とくに正面玄関が大きな損傷をうけ、19世紀に修復したものの粗雑なものとなり、また内陣も1359年にイギリス軍が放火し、1704年に再建された。したがってここで見るべきものは、何よりも身廊のその見事な柱頭彫刻群であろう。それは同じブルゴーニュ地方の、かつてガロ＝ロマンの首都であったオータンのサン・ラザール教会にある主題ときわめてよく似ている。

たとえば「エジプト逃避」「砂漠におけるキリストの誘惑」「ユダの首吊り」「マドレーヌにおけるキリストの出現」「偽予言者、バラム」等がそれである。しかしその表現は異なっていて、こまかく、優雅さではオータンに劣る。だが、逆にリアリズム的だし、迫真力がある。ソーリユとオータンはシャルル・ショーヴ王が発した認可書（843年）によってつながり、前者が後者の権限に服したことは明らかで、柱頭彫刻の主題が似ていることも当然と言えよう。しかし、オータンよりは表現の多様性、とくに技術の水準での卓越性が目についた。たとえば、植物文様である葉のシンプルな大ぶりの柱頭彫刻や若葉の入り組んだ彫刻、あるいは透し彫りに似たものがあるかと思えば、キリスト教の主題でも、優雅なものと、厳しい線で刻まれたものがあるからである。

「エジプト逃避」は葉文様のあいだに聖母子が馬にのっている。下方には馬車の車輪のような浮彫りが三つ横に並んでいる。キリストを抱きしめているマリアは、その前をむいた眼差はきびしい緊張感にみちているものの、手の仕草はやわらかだ。またマドレーヌにあらわれたキリストは、力動的であり、一つの対応する劇的空間を大胆につくりあげているとはいえ、表現に厳しさはない。「墓の聖女たち」を眺めると、とくに天使の首をややかしげた姿に思わず微笑をさそうものがある。こういう彫刻を見ていると、古代から北上してきたヘレニズムの大きな影響を思わずにはいられない。このことはブルターニュ地方のケルト系文化を刻印する線状の彫刻と比較するとよくわかる。私はその半島の先にあるロックトゥディ教会やフスナン教会の特異な抽象的文様や北の岬、ペロス・ギレックの紐状の「イサクの犠牲」などを思い出したものだ。

他方、シニカルでカルカチュアライズされたものに「ユダの首吊り」がある。やせほそったユダの身体と折れ曲がったその首には凄惨なおもむきさえある。これを刻んだ工人（アルティザン）の情念が背後にうかがわれるのである。彼は刻まれてから9世紀近くも、この教会の柱頭にぶら下がったままである。

他方、偽予言者バラムがろばに乗った浮彫りがある。モアブの王バラクがイスラエルの民を恐れ、予言者バラムに使者を送ってイスラエルの民を呪うために呼ぼうとする。途中天使があらわれてそれを止めようとするその伝承を物語る場面であろう。呪いをかけようとするためか、バラムの顔付は恐ろし気である。正面から見ると眼をよせ、頭巾をかぶり、手に斧のようなものを持っている。いかがわしさが全体ににじみ出ており、作者の見事な想像力を感じさせずにはおかない。ちょうど「エジプト逃避」と一対の印象を与えよう。

これに反して砂漠で悪魔がキリストを誘惑している主題は、善悪のロマネスク的二元論をこの上もなく適切に表現しており、キリストの顔と姿の高貴さに一つの「勝利」をよみとることができる。この教会の柱頭彫刻の多様性の一つとして最後に森の樹に棲むフクロウの図をあげよう。眼を夜の闇に見ひらく賢者のこの鳥は、エジプト神話での鷲と一対であり、また中世のユダヤ教会の紋章でもあり、多義的で解きがたい。サン・タンドウシュ教会は、さながら中世そのものの謎と象徴の森のように私にはつきぬ興味をひきおこすのであった。

Château de Chailly
シャトー・ドゥ・シャイイ

中世がいまだに息づいているブルゴーニュにいらっしゃいませんか？数々の銘酒を生み出すぶどう畑、グルメレストランの数々、中世そのままの街並、美しく広がる大地や小さな村々、豊かな生命力と「はだのぬくもり」を感じる地方、それがブルゴーニュです。

問い合わせ先:㈱佐多商会　ブルゴーニュ事業部
TEL:03-3586-4558（東機貿ビル内）　担当:岩沢、田中